マコトの声に気を引き戻され視線を戻すと、もう一頭に対峙する与力が、今にも引き倒されようとしていた。
再び印を組みマントラを唱える。取り出した札で簡易な罠を張り、怨霊がその場から逃げるのを防ぐ。次いで、札を貼り付けた小刀で怨霊に斬りかかった。
「かたじけない！」
「僕も一体一は自信ないから、援護して！」
与力と共に一頭の怨霊に当たる。
リンドウは、行く道で聞いたマコトの分析を思い出していた。
人間と動物の怨霊。動物の方は、力は弱いが分身して人目に良くつく。本体と思しき怨霊は中々姿を現さない。
――恐らく、この狼達は本体から目を逸らす為の囮なのだ。
「だとすれば、神子殿とチナミくんの方に、本体が居るってことか…」
小さく呟くと、隣に来ていたマコトが言う。
「私もそう思います。急ぎ、この場は片付けましょう」
そこからは、与力を庇いながら刀を振るうマコトを術で援護しながら、二頭の怨霊にあたる。彼の剣技は見事なもので、併せて振るう扇も相まって、まるで舞うようにも見えた。頭頂部で結わいた長い髪が、ゆらりと残像を作る。
（様になっているよなぁ…）

そんなことが心中に浮かんだ。リンドウは決して武士になりたいとは思わない。だが、マコトとチナミの兄弟しかり、八葉しかり。そして、慶喜を見ていると、己の志に邁進する姿を眩しく思うこともあった。
怨霊の一体が消滅し、残り一体にマコトが斬りかかる。
結界との境界で斬りつけられた怨霊は消滅し、ふっと周囲の冷気が和らいだ。
「これで、終いでしょうか」
辺りを見回しながら与力が言う。
「いや、まだです」
マコトの視線の先を追うと、怨霊の切れ端のような小さな光の玉が道を進んでいた。
「もしかすると、本体に戻るのかな」
三人は、光の玉を追うことにした。

◇

「おい、ゆき。止まれ！」
一方、駆けだして言ったゆきを追うチナミは、ようやくゆきの姿をとらえて静止するように声を投げた。
「あ、チナミくん」
「あ、じゃない。勝手に列を離れるとは何事だ」

「ごめんなさい。でも、あの女の子が…」
「なに、どこに女子がいると」
ゆきが指し示す先を見ても、人の姿は見当たらない。
「あ、待って！」
「こら、ゆき！」
見えない者を追う神子と、それを追う八葉。これまでも、あった光景だが、今はゆきとチナミ二人きりだ。
「これ以上は危険だ。お目付殿と兄上の到着を待ってから…っ」
ふと、視線の先で霧が集まったかと思うと、異人の少女の姿が現れた。
「なっ…！」
「ねぇ、待って。あなたは誰？」
怯む様子も見せず、ゆきが問いかける。
「どうして私を呼んだの？」
ゆきが言う通りなら、ここまで彼女を導いたのは、目の前の異人の少女の姿をした怨霊ということになる。
再び、少女の姿をした怨霊は歩み出した。
追って行くと、やがて小さな神社の前に出る。少女の姿をした怨霊は、そこで立ち止まり、黒い穴の空いたような虚ろな目でゆきとチナミを見つめた。
「そこに、何かがあるの？」
ゆきが尋ねると、小さくうなづく。そして、無言のまま指で境内の中を指した。
「じゃあ、一緒に行こう」
言って、ゆきが境内に入ろうとすると、少女は首を振る。
「駄目なの？」
「その娘は怨霊だろう。お前が浄化する前の江戸ならいざ知らず、神社内に入れる筈が無い」
「あ…」
今気付いたと言うように、ゆきが俯く。
それを見て、チナミが意を決したように少女の怨霊に向き直った。
「お前の望みは何だ。境内に何がある。事によっては、代わりに願いを果たしてやらんこともない」
虚ろな目がチナミを見つめた。しかし、声が聞こえてくることはない。
「…これでは、どうしようもないな」
二人が途方にくれていると、後方から足音が聞こえてきた。複数の人間と、獣の駆ける音だ。
「チナミ！」
「っ兄上」
「ゆき、気を付けて！」
マコトにリンドウの声がする。